

富山県富山市方言



富山県方言区画図

【富山県の方言区画】富山県は、古代から越中国として行政的にまとまりのある地域であり、方言的にも均質性が高い。日本の方言を東西に二分するとき、その北境はほぼ新潟・富山県境（あるいは新潟県内）に引かれ、富山県側は存在動詞「オル」、動詞否定形「～ン」などの特徴を持つ点で西日本方言に属するとされる。県内の方言は、大きく、東部～中部の「呉東（ごとう）方言」、西部平野域の「呉西（ごせい）方言」、西部山間域の「五箇山（ごかやま）方言」に分けられる。「呉東」「呉西」とは、呉羽（くれは）丘陵を境とする地域区分で、地域名称としては「五箇山」も含む県西部全体が「呉西」とされるが、方言区画上は「五箇山」が特立される。「呉西方言」は氷見市の「呉西北部方言」と高岡市を中心とする「呉西南部方言」に、「呉東方言」は富山市を中心とする「呉東西部方言」と魚津市以東の旧下新川郡域にあたる「呉東東部方言」に、下位区分できる。近世期は、県の大部分が今の石川県とともに加賀藩に属しており、県中央を南北に流れる神通川流域にその支藩・富山藩が置かれ、現在の富山市街地が富山藩の城下町として発達した。明治になって富山市街地に富山県庁が置かれ、呉東西部が富山市の経済圏となる。方言において、呉西と呉東東部が類似し、富山

市を含む呉東西部が別の特徴をみせる語彙・文法事象が複数あるのは、こうした近世以降の行政・経済史の反映であろう。また、呉西は、地理的に西隣の石川県からの影響を受けやすい。呉西北部と南部は丘陵地によって地理的に隔てられ、主に語彙面で違いがあることが指摘されている。五箇山は、隔絶された地理環境により平野部とは異なる特徴を保持・発達させてきたが、近年は平野部の影響を受けている。

【富山市方言について】富山市は県内の区画上は呉東西部方言に属す。名詞述語を作る助動詞「ダ、b 類（一段）動詞の命令形における「見レ」等の「～レ」形、勧誘・否定意志・否定推量を表す「書カンマイ」等の「～ンマイ」形など、呉西・五箇山や呉東東部とは異なる文法特徴を発達させている。

【表記について】富山市方言には、いわゆるガ行鼻濁音が存在するが、破裂音と区別せず、「ガ、ギ、…」/g/のように表記する。

【調査概要】本稿の記述は、富山市街地・富山市北部で生育し、調査時も居住する高年層話者（大正年間～昭和20年生まれ）への聞き取り調査、および、富山市北部で生育した筆者（1973年生まれ）の内省にもとづく。用例には、富山市南部の自然談話文字化資料、および、富山市北部の伝承資料から引用したものも含む（用例出典参照）。自然談話資料の用例の表記は、片仮名から漢字平仮名混じりに改めた。引用元を記していない用例は、聞き取り調査や筆者の内省によって得たものである。談話資料も含め、ここで対象としているのは平成の合併以前の富山市域に限られる。

富山県富山市方言の活用表

《動詞》

活用形		類別			
		a類 書く	b類 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カカレ	ミレ ミー ミラレ	コイ コラレ	セー シレ シラレ
	禁止	カクナ カカレンナ	ミルナ ミラレンナ	クルナ コラレンナ	スルナ シラレンナ
	意志	カコ(ー)	ミヨ(ー) ミ0口(ー)	コー コヨ(ー) クロ(ー)	ショー シヨ(ー) シロ(ー)
	推量	カコ(ー)	ミヨ(ー) ミ口(ー)	コー コヨ(ー) クロ(ー)	ショー シヨ(ー) シロ(ー)
	勧誘・否定意志・ 否定推量	カカンマイ	ミンマイ	コンマイ	センマイ
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カITE	ミTE	キTE	シTE
	仮定	カキャ カイタラ カイタチャ カイト	ミリヤ ミタラ ミタチャ ミタト	クリヤ コリヤ キタラ キタチャ キタト	スリヤ シリヤ シタラ シタチャ シタト
	逆接	カケド	ミレド	クレド コレド	スレド シレド
派 生 類	否定	カカン	ミン	コン	セン
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス カカセル	ミサス ミサセル	コサス コサセル	サス サセル
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カケル カカレル カケエル	ミレル ミラレル ミレエル	コレル コラレル コレエル	《デキル》 シラレル
	尊敬	カカレル カカッシャル	ミラレル ミッシャル	コラレル コッシャル	シラレル セッシャル シッシャル
	継続	カイトル	ミトル	キトル	シトル
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクガ(ダ)	ミルガ(ダ)	クルガ(ダ)	スルガ(ダ)

a類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イツ-タ」。
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・u	ダイ-タ ダシ-タ	sをiにする形と基幹イ段形の併用。「出す」などイ段形しかとらない動詞もある。
t/c	立つ tac・u	タツ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キツ-タ	tをQ(促音)にする。
w/	買う ka(w)・u 誘う saso(w)・u	コー-タ サソ-タ	wは(子音なし)に。wの前の母音がaの場合はoに変える。基幹が1拍の場合は長音化する。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

	赤い	静か(だ)	学生[ガクセー](だ)	
終止類	断定非過去	アカイ	シズカ(ダ)	
	断定過去	アカカッタ	シズカダッタ	
	推量	アカカロー	シズカダロー	
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	
	連体過去	アカカッタ	シズカダッタ	
	中止	アカテ	シズカデ	
	仮定	アカケリヤ アカカッタラ アカカッタチャ アカカッタト	シズカナラ シズカダッタラ シズカダッタチャ シズカダッタト	学生ナラ 学生ダッタラ 学生ダッタチャ 学生ダッタト
	逆接	アカカレド アカケレド	シズカダレド	学生ダレド
派生類	否定	アカナイ	シズカデナイ シズカジャナイ シズカダナイ	学生デナイ 学生ジャナイ 学生ダナイ
	なる	アカナル	シズカ(ニ)ナル	学生(ニ)ナル
	副詞	アカナト アカク	シズカニ	(該当形 欠)
	丁寧	アカイデス	シズカデス	学生デス
	のだ	アカイガ(ダ)	シズカナガ(ダ)	学生ナガ(ダ)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

a類動詞(五段動詞)は型、b類動詞(一段動詞)は型と型r、「来る」は型kと型r、「する」は型sと型rの活用形をもつ。

b類動詞「見る」では、命令形に「ミレ」、意志・

推量形に「ミロ(ー)」という型rの形が存在する。

この点で型r化が共通語よりも進んでいる。

「来る」は意志・推量形に型rの形「クロー」がある。

「する」は、命令形に「シレ」、意志・推量形に「シロー」という型rの形があり、b類動詞と同等に

型 r 化が進んでいる。尊敬形に「シラレル」がある点も b 類動詞に似る。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形が同形で、ウ段形「カク」「ミル」「クル」「スル」などとなる。末尾拍ガルの a 類「走ル」等、b 類、「クル」「スル」では、カ・サ・ザ・タ行子音で始まる助詞・形式名詞が続くときにルが促音化、鼻音(ナ・マ行とガ行鼻音)で始まる助詞・形式名詞が続くときにルが撥音化しうる。なお、過去形も含めて、断定形に付く終助詞として「チャ」「ワ」「ゼ」などがある。

- ・すぐ手紙書くちゃ。(すぐに手紙を書くよ。)
- ・今からあんたとこ{くる/くっ}ちゃ。(今からあなたのところに来る(=行く)よ。)

ただし、b 類動詞で、撥音化するとアクセントも含めて否定形と同音となる場合は、撥音化が許されない(詳しくは小西 2008 参照)

- ・せいじろじろ{見る/×見ん}もん、おっけよ。(そんなにじろじろ見る者がいるかよ。)

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形、連体過去形が同形。a 類動詞は基幹音便形に、b 類動詞は 型基幹(=語幹)に、「来る」「する」はそれぞれ 型 k・s のイ段形「キ」「シ」に、「タ」を後接する。

- ・雪の日でも草履で学校へ行ったちゃ。(雪の日でも草履で学校へ行ったよ。)(北前・「浦の女房の賃稼ぎ」)

〈命令形〉

一つはぞんざいな命令形で、a 類動詞では「カケ」などエ段形、b 類動詞では「ミー」「オキ」など 型基幹(長音)形と、「ミレ」「オキレ」など 型 r のエ段形が併存する(型基幹の形は基幹 1 拍のとき長音化)。「する」も、 型 s のエ段長音形「セー」と、 型 r のエ段形「シレ」が併存、「来る」は不規則な「コイ」のみである。このぞんざいな命令形は単独では使いにくく、終助詞「マ」「ヤ」を付けて用いられる。

- ・はよ みーま。(早く見ろよ。)

もう一つはやさしい命令形で、 型ア段形「カカ」「ミラ」「コラ」「シラ」などに「レ」を付す。この

形では終助詞「マ」「ヤ」の付加が任意となる。

- ・はよ 見られ(ま)。(早く見なさい(よ))

〈禁止形〉

命令形に対応して、ぞんざいな形とやさしい形がある。前者は断定非過去形に「ナ」を付す。断定非過去形の末尾が「ル」のとき撥音化することが多い。また、単独で用いにくく、終助詞「マ」「ヤ」を後接させる。やさしい形は、 型ア段形に「カカ」「ミラ」などに「レンナ」を付す。この形は終助詞「マ」「ヤ」の付加が任意となる。

- ・じろじろ{見るなま/見んなま}(じろじろ見るなよ。)
- ・じろじろ見られんな(ま)。(じろじろ見なするな(よ))

「書カレン」など可能否定形も禁止を表す。可能形のところで触れる。

〈意志形・推量形〉

意志形と推量形が同形となる。a 類動詞はオ段長音形、b 類動詞は「ミヨ(ー)」など 型基幹に「ヨ(ー)」を付す形と、「ミロ(ー)」など 型 r のオ段(長音)形とが併存する。「来る」は、 型 k のオ段長音形「コー」、 型オ段に「ヨ(ー)」を付す「コヨ(ー)」、 型 r のオ段長音形「クロ(ー)」がある。「する」は、 型 s のイ段「シ」に「ヨ(ー)」を付す「シヨ(ー)」とその縮約形「シヨー」、 型 r のオ段(長音)形「シロ(ー)」がある。b・c・d 類の 型 r の形は意志形よりも推量形で現れやすい。また、意志形では「カコ。」など短音形が現れやすいのに対し、推量形では、特に単独で終止する場合に長音形になるのが普通。推量形に付く終助詞に「ガイ」「ゲ」「ワイ」があり、これらが付くと推量形でも短音化しやすい。推量形に「ガイ」「ゲ」が付いた形には確認要求の用法もある。

- ・テレビでも{見よ/見ろ}かな。(テレビでも見ようかな。)
- ・あのっさんも、こい映画{見よー/見ろー}(あの人もこんな映画を見るだろう。)
- ・お宮はんに手洗い鉢あるげ。(神社に手洗い鉢があるだろ?)(北前・「ソ連時代のカムチャツカ」)

推量形では、断定形に「ダロ(ー)」または「ヤロ(ー)」を付す「カクダロ(ー)」などの使用も増え

てきている。

〈勧誘・否定意志・否定推量形〉

a類はア段形に、b類は 型基幹に、「来る」は「コ」に、「する」は「セ」に「ンマイ」が付く。勧誘の場合、助詞「カ」「ケ」を後接することもあり。若い世代では否定意志・否定推量の意味を失い、勧誘専用形となりつつある。

- ・こいとこ、もう来んまい思て、(こんなところもう来るまいと思って、)(北前・「それでもまた蟹工船へ」)
- ・あんまり暗がりから魚釣れんまいげ。(あまり暗い内から魚は釣れないだろう?)(北前・「蟹工船エトロフ丸事件」)
- ・一緒に旅行{いかんまい / いかんまいか / いかんまいけ} (一緒に旅行に行こう。)

〈中止形〉

a類は基幹音便形に、b類は 型基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に、「テ」を後接する。

- ・朝から働いて、ほして帰って来てデッキへ上がる時や暗なるとる。(朝から働いて、そして帰って来て、デッキへ上がる時には暗なっている。)(北前・「蟹工船エトロフ丸事件」)

〈仮定形〉

型拗音ア段「カキヤ」「ミリヤ」等が使われる。「エ段」に「バ」の付いた「カケバ」などの縮約形である。「来る」では「クリヤ」のほか「コリヤ」、「する」では「スリヤ」のほか「シリヤ」がある。

- ・あんたいきゃ、太郎もいくゆーやろ。(あなたが行けば、太郎も行くと言うだろう。)

a類動詞の音便基幹、b類動詞の 型基幹、「来る」「する」の「キ」「シ」に「タラ」「タチャ」「タト」を付した形もある。予測的条件文でも可能だが、恒常・反復的に成り立つ事態間の関係を表す場合に使用されやすい。

- ・今あんなことやったらね、やっぱり三日もおらんちゃ。(今あんなことをやったらね、やっぱり三日もないよ。)(藤木)
- ・つけたちや、なも、出て来るがに時間かかって。(船を港に)付けると、もう、出て来るのに時間かかって。)(北前・「天塩通いの材木船に乗って」)
- ・願かけて途中でやめたと、気やおかしくなる

云うた。(願をかけて途中でやめると気がおかしくなると言った。)(北前・「パイ船での北海道通い」)

〈逆接形〉

共通語の「書くけど」などにあたる逆接形に、型エ段形に「ド」を付す形がある。

- ・しるし付けたシャモジ立てて水加減すれど、船や傾くがで狂いやすい。(印を付けたシャモジを立てて水加減をするけど、船が傾くので狂いやすい。)(北前・「父の遭難」)

最近は、共通語と同様に「カクケド」など断定形に「ケド」を付した形の使用も多くなってきている。

〈否定形〉

a類動詞は 型ア段に、b類動詞は 型基幹に、c類「来る」は「コ」に、d類「する」は「セ」に、「ン」が付く。否定形は不規則な活用をする。「見る」で代表させると次のとおり。

断定非過去・連体非過去形 ミン

断定過去・連体過去形 ミナンダ、ミンダ、
ミンカッタ

推量形 ミンカロー、ミンマイ

中止形 ミナンデ、ミンデ、ミント

仮定形 ミンニヤ、ミンケリヤ

逆接形 ミンネド

- ・佐渡の小木には滅多によらん。(佐渡の小木には滅多に寄らない。)(北前・「パイ船での北海道通い」)

- ・幸徳丸は八百石、千石までは積まなんだ。(北前・「パイ船時代」)

- ・しとあーどーだったか知らんねど、わたしらね、そーだったね。(人はどうだったか知らないけど、私達はね、そうだったね。)(藤木)

〈丁寧形〉

a類動詞は 型イ段に、b類動詞は 型基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に、「マス」が付く。ただし丁寧形自体があまり使われない。

- ・波ん中すかいて見っと、うじゃうじゃおりますちゃア。(波の中を透かして見ると、うじゃうじゃいますよ。)(北前・「ニコライエフスクへ」)

〈使役形〉

a類動詞はア段形に「ス」「セル」が、b類動詞は

型基幹に「サス」「サセル」が、「来る」は「コ」に「サス」「サセル」が、「する」は「サ」に「ス」「セル」が付く。「ス」「サス」の付く形はa類動詞に、「セル」「サセル」の付く形はb類動詞に準じた活用をする。

- ・ こどもも学校 { いかした / いかせた } (子供たちを学校に行かせた。)

〈受身形〉

型ア段形に「レル」が付く。b類動詞に準じた活用をする。

- ・ どんだけし かられた もんやら。(どれだけ叱られたものか。)(藤木)

〈可能形〉

「カケル」「ミレル」「コレル」など型エ段形に「ル」が付く形、「カカレル」「ミラレル」「コラレル」など型ア段形に「レル」が付く形、「カケエル」「ミレエル」「コレエル」など型エ段形に「エル」が付く形がある。ともb類動詞に準じた活用をする。は、能力可能・状況可能のどちらにも用いられる。も能力可能・状況可能のどちらにも用いられるが、状況可能での使用に偏る。また、の否定形は「～してはいけない」にあたる禁止表現として使われる。は、能力可能でしか用いられず、否定形での使用に偏る。「する」は主に代替形「デキル」が用いられるが、にあたる「シラレル」形もある。

- ・ あんた、一人で服 { 着れる / 着られる / 着れ える } け。(あなた、一人で服を着られる?)
- ・ そいとこで泳がれん。(そんな所で泳いではいけない。)
- ・ 製板どもならそいいうでかいとちや続けえんもんやちや。(製板などならそんなにたくさんは続けられないものだよ。)(北前・「能登通いの材木船に乗って」)

〈尊敬形〉

主に「カカレル」「ミラレル」「コラレル」など型ア段に「レル」が付く形が用いられる。「する」では「シラレル」が用いられる点で、受身形と異なる。

- ・ 子供だしにして、なーんご飯の用意もなんにもしられんが。(子どもをだしにして、ちっともご飯の用意も何もなさらないの。)[藤木]
- 「ツシャル」形は、呉西や呉東東部で優勢な形で、

富山市街地ではあまり用いられない。a類動詞では型ア段形に、b類動詞では「ミツシャル」など型基幹に、「来る」は「コ」に、「する」は「セ」または「シ」に、「ツシャル」が付く。

- ・ 宮の下のとこ住んどったから宮下としたがだろて、御坊はん言わっしゃる。(宮の下の所に住んでいたから宮下としたのだろて、住職は仰る。)(北前・「父の遭難」)

〈継続形〉

a類は基幹音便形、b類は型基幹、「来る」は「キ」、「する」は「シ」に「トル」が付く。a類動詞に準じた活用をする。「モ」などの助詞で動詞をとりたてると「テ-助詞-オル」となる。西日本に広く見られる「ヨル」形はない。

- ・ 爺はんの兄弟もみんな三が付いとった。(爺さんの兄弟も皆(名前に)三が付いていた。)(北前・「パイ船時代」)
- ・ まだ見てもおらんがだる。(まだ見てもいないのだろて。)

〈希望形〉

a類はイ段、b類は型基幹、「来る」は「キ」、「する」は「シ」に「タイ」が付く。「タイ」形は形容詞型の活用をする。

- ・ おらも行きたかった。(私も行きたかった。)

〈のだ形〉

連体形に「ガ(ダ)」を後接する。聞き手に情報を提示する場合は、「ガ」で終止するか、「ガダ」に「チャ」などの終助詞を付ける。「ガダ」で言い切るのは話し手が新たな認識を得たことを述べる場合などに限定される。「ガ」に直接付く終助詞として「ヨ」「イネ」がある。非過去形の末尾拍ルは撥音化しうる。

- ・ 朝出てくと朝嵐いうて、嵐あるが。(朝出て行くと、朝嵐と言って、嵐があるんだ。)(北前・「腕白のニコライエフスク密航」)
- ・ あれ?もう寝る/寝んがだ。(あれ?もう寝るんだ。)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

基本的に形容詞の活用は1型だが、語幹1拍の4語「コイ(濃)」「ウイ(憂。苦しい・窮屈だ)」「イー(良)」「ナイ(無)」は、やや不規則な活用をする。

- ・食はずぎて、腹ういわ。(食はずぎてお腹が苦しいよ。)

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形と連体非過去形は同形で、語幹に「イ」を付す。終助詞「チャ」「ワ」「ゼ」等が付きうる。

- ・顔 あかいぜ。(顔が赤いよ。)

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形・連体過去形は同形で、「アカカッタ」など語幹に動詞型音便基幹「カッタ」を付す。語幹1拍語のうち「コイ」「ウイ」は語幹を長音化した「コーカッタ」「ウーカッタ」となる。「イー」は「イカッタ」、「ナイ」は「ナカッタ」。

- ・お茶こかった。(お茶が濃かった。)
- ・あつで仲のいかったしとなん。(あれで仲の良かった人なの。)(藤木)

〈推量形〉

語幹に動詞型オ段(長音)形「カロ(ー)」を付す。語幹1拍語は「コーカロ(ー)(濃)」「ウーカロ(ー)(憂)」「イカロ(ー)(良)」「ナカロ(ー)(無)」となる。

- ・値段たかかろげ。(値段が高いだろうよ。)

〈中止形〉

「アカテ」など語幹に「テ」が付く。語幹1拍語は「コ(ー)テ(濃)」「ウ(ー)テ(憂)」「イテ(良)」「ナテ(無)」となる。

- ・値段たかて買えん。(値段が高くて買えない。)

〈仮定形〉

語幹に「ケリヤ」が付く形を主に用いる。語幹1拍語は「コーケリヤ(濃)」「ウーケリヤ(憂)」「イケリヤ(良)」「ナケリヤ・ナケンヤ(無)」、「無い」に不規則な形がある点が特徴的である。

- ・運が悪けりゃ一週間かかった。(運が悪ければ一週間かかった。)(北前・「バイ船での北海道通い」)
- ・傘{なけりゃ/なけん^にゃ}貸したげっちゃ。(傘がなければ貸してあげるよ。)

ほか、動詞と同様に「カッタラ」「カッタチャ」「カッタト」が付く形がある。

〈逆接形〉

語幹に動詞型工段形「カレ」または「ケレ」が続く、さらに「ド」を付す。語幹1拍語は「コーカレ

ド・コーケレド(濃)」「ウーカレド・ウーケレド(憂)」「イカレド・イケレド(良)」「ナカレド・ナケレド・ナケンネド(無)」、「無い」に不規則形がある。

- ・値段たかかれどこーた。(値段が高いけど買った。)
- ・鉄甲板などは薄けれど速い。(鉄甲板などは薄いけど速い。)(北前「沿海州パトロール」)
- ・あんま時間{なけれど/なけん^ねど}見てこー。(あまり時間がないけど、見て行こう。)

〈否定形〉

語幹に形容詞「ナイ」を後接する。語幹1拍語は「コーナイ(濃)」「ウーナイ(憂)」「イーナイ(良)」となる。「ナイ」の前に「モ」等の助詞が介在しうる。

- ・そいたかもない。(そんなに高くもない。)

〈なる形〉

語幹に「ナル」が後接する。語幹1拍語は「コーナル(濃)」「ウーナル(憂)」「イーナル(良)」、「無い」は不規則で「ナイガニナル(無)」となる。否定形同様、とりたて助詞が介在しうる。

- ・ほつて泥恋しなるいうて持つてく。(そして泥が恋しくなると言って持っていく。)(北前・「それでもまた蟹工船へ」)

〈副詞形〉

否定形・なる形で語幹が使われるのに対し、自立的な副詞形では語幹に「ナト」を付す形が使われる。呉西では「ラト」が多く、富山市内でも聞かれる。

- ・漁場のこたア、昔、安なと買われたもんでしょ。(漁場は昔は安く買われたものでしょう。)(北前・「北千島・網走間ピストン輸送」)

若い世代では「ナト」形が失われ、語幹に「ク」付す形が使われる。

〈丁寧形〉

断定形に「デス」を後接した形になる。ただし、動詞と同様、丁寧形自体あまり用いられない。

〈のだ形〉

断定形に「ガ(ダ)」が続く形になる。「ガ」と「ガダ」の違いは動詞と同様。

- ・盆までちもんな、あんた、なーん、ほとんど休みちゃないが。(盆までというものは、あなた、ほとんど休みはないの。)(藤木)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形は、形容名詞・名詞に「ダ」を付す。「ダ」のほか「ヤ」「ジャ」も使われることがあるが、ここでは「ダ」で代表させる。「チャ」「ワ」等の終助詞を付ける場合が多く、「ダ」だけで言い切るのは、話し手が新たな認識を得た場合などに限定される。形容名詞・名詞単独で言い切ることもあり、名詞に終助詞「ヨ」「イネ」が直接続く形もある。「名詞」と「名詞+ダ」の違いは、のだ形における「ガ」と「ガダ」の違いと並行的である。

- ・この部屋えらい静かだわ。(この部屋はえらく静かだよ。)
- ・まだその頃あ北海道通いだけやから、主にニシンだちゃ。(まだその頃は北海道通いだけだから(運んでくるのは)主にニシンだよ。)(北前・「浦の女房の賃稼ぎ」)
- ・火一熾いて、火鉢に炭火入れて、鉄瓶にお湯沸かすがが仕事。(火を熾して、火鉢に炭火を入れて、鉄瓶にお湯を沸かすのが仕事。)(藤木)
- ・おら、岩瀬の浦、浜の方の生れイね。(私は岩瀬の浦、浜の方の生まれだよ。)(北前・「浦の女房の賃稼ぎ」)

連体非過去形は、形容名詞の場合は動詞型尾略形「ナ」が後接する。名詞には述語としての連体非過去形はなく、格助詞「ノ」を用いる。

- ・あつてハイカラな人だったちゃ。(あれでハイカラな人だったよ。)(藤木)

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形・連体過去形は同形で、動詞型基幹音便形「ダッ」に「タ」が続く。

- ・きんのまであの通り静かだった。(昨日まであの通りは静かだった。)
- ・兵隊の時に看護卒だったもんとか、(兵隊の時に看護卒だった人とか)(北前・「オホーツクのロシア人・現地人たち」)

〈推量形〉

動詞型才段(長音)形「ダロ(ー)」を付す。推量形では「ダロ(ー)」に替わり「ヤロ(ー)」が現れやすい。

- ・あの部屋、静かだろがいね。(あの部屋は静かだろうよ。)

- ・今生きとりゃ八十歳か百歳やる。(今生きていれば80歳か100歳だろう。)(北前・「パイ船での北海道通い」)

〈中止形〉

「デ」を後接する。

- ・三次郎爺はんちゃ、なかなかの人で、その時分な、おらとこも何とかやとった。(北前・「パイ船時代」)

〈仮定形〉

動詞型ア段形「ナラ」を付すのが普通だが、「ダッタラ」「ダッタチャ」「ダッタト」を付す形もある。

- ・河なら流れとるはずだろ。(川なら流れているはずだろう。)(北前・「腕白のニコライエフスク密航」)

〈逆接形〉

動詞型エ段形「ダレ」に「ド」を付した「ダレド」を用いる。

- ・網あ建網みたいもんだれど、ずーっと底へ入ってくよになつとる。(網は建網みたいなものだけど、ずーっと底へ入ってくよになっている。)(北前・「それでもまた蟹工船へ」)

〈否定形〉

「デ」に形容詞「ナイ」が続く。「デ」が「ジャ」、稀に「ダ」に替わる場合もある。「デ」の場合のみ、間に「モ」「チャ」などの助詞が介在しうる。

- ・あんな静かでないわ。(あまり静かではない。)
- ・A: えまのばあちゃんじゃないがだろ。(今の婆ちゃんじゃないんでしょ?)
- ・B: えー。えまのばあちゃんでないがー。(ええ。今の婆ちゃんじゃないの。)(藤木)
- ・縁続きだないからね。(縁続きじゃないからね。)(藤木)

〈なる形〉

「ニ」を付し、動詞「ナル」が続く。「ニ」は母音が落ちて「ン」となったり、脱落したりする。「ニ」の後に「モ」などの助詞が介在しうる。

- ・指三本ほどで腹一杯なるちゃ。(指三本ほどで腹が一杯になる。)(北前・「それでもまた蟹工船へ」)

〈副詞形〉

形容名詞に「ニ」を付す。

- ・静かに歩かれま。(静かに歩きなさいよ。)

〈丁寧形〉

「デス」を付す。ただし、他の品詞同様、丁寧形自体があまり用いられない。

- ・合計だいたい五十人の漁場ですちゃ。(北前・「ニコライエフスクへ」)

〈のだ形〉

動詞型尾略形「ナ」に「ガ(ダ)」を付す。「ダ」の有無の違いは他品詞と同様。

- ・おらっちゃでも佐渡のむこう走った方が楽なが。(私でも佐渡の向こうを走った方が楽なの。)(北前・「天塩通いの材木船に乗って」)

用例出典

北前：井本三夫編(1998)『北前の記憶 北洋・移民・米騒動との関係』桂書房

藤木：富山県教育委員会編・水野元雄著『昭和56年度富山県方言収集緊急調査』(未公開、国立国

語研究所所蔵。引用は「むかしの遊び・むかしの農村」と題された部分から。)

参考文献

小西いずみ(2004)「富山県方言の文法 地理的分布と記述研究の視点から」中井精一・内山純蔵・高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば 富山県方言の過去・現在・未来』桂書房

小西いずみ(2008)「富山市方言における用言のアクセント 終止連体形の音調交替を中心に」『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』桂書房

真田信治編(1998)『日本のことばシリーズ 16 富山県のことば』明治書院

下野雅昭(1983)「富山県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』国書刊行会

(小西いずみ)